

保育士，幼稚園・小学校教諭養成課程に おけるピアノ指導

坂井 康子・山崎 和子・衣川 久美子
篠原 眞紀子・古庵 晶子

Consideration of Piano Teaching in Teacher Training Courses of Infant and Elementary School Education

SAKAI Yasuko, YAMASAKI Kazuko, KINUGAWA Kumiko,
SHINOHARA Makiko, KOAN Akiko

In 2006 we introduced a new piano curriculum at Konan Woman's University Department of Childhood Development and Education. The purpose of this program is to enlighten soon to be nursery and elementary school teachers with a greater appreciation of music, piano skills and teaching methods. We aim to prepare students to practice nursing and teaching and to also pass the employment tests. We recently conducted surveys to measure the effectiveness of the program over the past 2 years. Our surveys will help us better refine our curriculum. In this paper we discuss the findings of our surveys.

1. 研究の目的

大学等における保育士，幼稚園・小学校教諭養成課程では，授業時数は機関により異なるが，ピアノ演奏に関する授業が概ね必修となっている。ピアノ演奏の習熟のためには長期の継続的な学習が必要であるため，入学時に初心者である場合などは特に，在学中の短期間にピアノ演奏をマスターすることが困難な場合が少なくない。こうした現状の中で，各養成機関ではさまざまな取り組みが行われている（梁島他1989，1993，1996，2001，若菜他2006，上谷・津山2007，小倉2007，小西・清2007，星野2007）。

甲南女子大学総合子ども学科（以下本学科）では，ピアノ演奏に関して，必修授業である「器楽・声楽Ⅰ，Ⅱ」の1年間と選択授業である「器楽・声楽Ⅲ」の半年間を設定している。本稿では，「器楽・声楽Ⅰ，Ⅱ」の2006年度と2007年度のピアノ指導を振り返り，学生の実態と教育現場の実情に沿った今後の指導のあり方

を考察する。

本学科における「器楽・声楽Ⅰ，Ⅱ」終了後の2年生の夏には保育実習，「器楽・声楽Ⅲ」終了後の3年生の夏には幼稚園実習があり，学生は在学中に実践経験をもち，それまでの学習の成果を試される。「器楽・声楽」の授業では，まず実習で求められる（保育・教育現場で通用する）演奏力をつけるべく指導を行い，そしてさらに採用試験用の曲を加え，1年間で最低30～50曲（内容は後述する）を課して，具体的な指針を示している。

一般のピアノ教室では，通常1回30分以上の個人レッスンを年間44回前後行っているが，大学等の保育士・教員養成課程においては，1回10分程度の個人レッスンが年間30回しかないところがほとんどである。ピアノの入門書であり現在も採用試験の課題として多くあげられているバイエル教則本（以下バイエル）は，音楽的素質に恵まれていないと，習得に6年余の時間がかかることもあるが，本学科のピアノ初心者の学生たちはそれを1年でマスターしなければならず，しかも

表1 器楽・声楽の授業と実習の位置

学年	1年		2年		3年	
器楽・声楽と実習の時期		器楽・声楽Ⅰ	器楽・声楽Ⅱ	保育園実習	器楽・声楽Ⅲ	幼稚園実習
受講者数		全員	全員	全員	48名定員	全員

バイエル終了程度の力では、保育・教育現場が求める弾き歌い(注1)やリズム曲(注2)の演奏などのレベルにとっても応えることができない。また経験豊かな学生にとってもハードルの高い応用力が求められている。こうした現状に加え、後述するが、学生のピアノ経験の程度はさまざまで、経験の浅い学生も少なくないため、個々の学生に適應する指導計画を立てることは非常に難しい。

ピアノ初心者 of 学生たちが採用試験に合格し、しかも即戦力となるための弾き歌いやリズム曲の演奏などの実力を在学中の短期間で習得させるためにはどうすればよいか。より効率の良い、そして効果的な授業を展開するために、これまでの授業内容と学生への質問紙調査の結果を分析し、今後のピアノ指導の可能性を探る。

2. カリキュラム—音楽関係授業の設定

本学科では、音楽に関する科目として「音楽の基礎Ⅰ(選択)」「音楽の基礎Ⅱ(選択)」「器楽・声楽Ⅰ(必修)」「器楽・声楽Ⅱ(必修)」「保育内容の研究(音楽表現)(必修)」「器楽・声楽Ⅲ(選択)」「初等教科教育法(音楽)(必修)」が、それぞれ保育士資格、および幼稚園教諭1種、小学校教諭1種免許取得のためのそれぞれ必修または選択科目として設定されている。

「音楽の基礎Ⅰ」「音楽の基礎Ⅱ」は他学科の履修も認められており、「音楽の基礎Ⅰ」では音楽理論、「音楽の基礎Ⅱ」では合唱を中心に非常勤講師1名による指導が行われている。

本論文で取り上げる「器楽・声楽Ⅰ」「器楽・声楽Ⅱ」は、1年後期と2年前期にそれぞれ設定されており(表1参照)、この授業は1名の専任教員と6名の非常勤講師によって指導が行われている。

「初等教育法(音楽)」は小学校教諭免許取得希望の学生が履修し、「器楽・声楽Ⅱ」と同じく2年前期に開設されており、専任教員1名が指導している。

「保育内容の研究(音楽表現)」は2年の後期に設定され、保育士・幼稚園教諭免許必修となっている。

指導は専任教員1名による。

「器楽・声楽Ⅲ」は3年の前期、1年間の「器楽・声楽Ⅰ、Ⅱ」の授業から半年を経て幼稚園実習前に設定されている(表1参照)。指導は「器楽・声楽Ⅰ、Ⅱ」と同じ1名の専任教員と6名の非常勤講師である。「器楽・声楽Ⅲ(定員48名)」は選択科目であるため、これを履修せず幼稚園実習に行く学生は多い。

3. 「器楽・声楽Ⅰ、Ⅱ」のピアノ指導の概要と履修者の状況

3-1 授業の運営の仕方

(1) ピアノの授業と履修者の概要

ピアノの授業は「器楽・声楽Ⅰ、Ⅱ」に含まれ、グループレッスンをを行っている。授業回数は「器楽・声楽Ⅰ」が15回、「器楽・声楽Ⅱ」が15回の30回である。2006年度生の授業履修者は113名、2007年度生は129名であった。履修者(2007年度生)の「器楽・声楽Ⅱ」終了時の希望進路は図1のとおりである。

(2) 習熟度別クラス編成

まず初回の授業でクラス分け試験を行い、その成績とピアノ等鍵盤楽器の経験度に関するアンケート(資料1)の結果を合わせて、初心者とそれに近い習熟度の「すみれ」クラス、一定以上の習熟度の「つばめ」クラスの2レベルに大別している。さらに、「すみれ」と「つばめ」を得点順に6段階(6人の指導者がそれぞれ担当する)に分け、習熟度別に3~4人のグループを36構成し、経験の似た者同士で相互に高め合うことをねらっている。1コマ90分を「ピアノのグループレッスン」と「コード奏(注3)など」の授業の45分ずつでローテーションすることにより、器楽・声楽Ⅰ、Ⅱの90分の授業が成立している(表2)。

(3) グループレッスン

グループレッスンは、1人が10分程度の個人レッスンを受けている間、残りの2~3人が聴講し、45分の間に順次交替するという形態である。指導者が毎回学生のレベルに合わせて宿題を出し、レッスンを行っている。

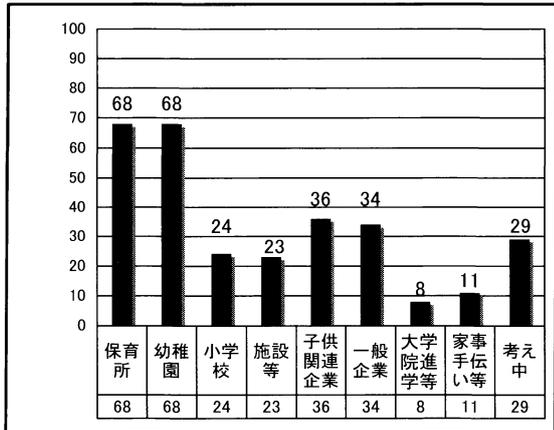


図1 2007年度生 卒業後の希望進路 (129名、複数回答有)
 ※乳児院・児童養護施設、その他の子どもに関する施設、また児童館・子育て支援センター・病院内保育所などは、「施設等」にまとめ、「家事手伝い等」の中には、ボランティア・専門学校・結婚などを含めた。大学院進学等には、海外留学なども含めた。

表2 習熟度別クラス編成と授業間ローテーション

担当	場所	内容	時間	レベル
専任教員 1名	ML教室	コード伴奏他 6グループ一斉授業	45分	すみれ つばめ
非常勤講師 6名	レッスン室	ピアノ3～4名の グループレッスン	45分	つばめ すみれ

(4) 授業の目的および目標と指導内容

我々指導者は、「音楽の楽しさを伝えられる学生の育成」を主な目的として取り組んでいる。ピアノでなければ音楽の楽しさが伝えられないということはないが、保育・教育現場の音楽表現活動においては、ピアノによる保育・教育が大きなウェイトを占めており、またほとんどの採用試験においてピアノ演奏を課しているという現状がある。そのため、授業の第一の目標は、保育・教育現場で役に立つ子どもの歌の弾き歌い・リズム曲などの教材を弾きこなす実践力の養成、第二の目標は、採用試験課題として出される頻度の高い曲を弾けるようにすることとしている。採用試験の出題傾向は多様で、バイエル80番以上、ブルグミュラー25番練習曲（以下ブルグミュラー）、ソナチネアルバム（以下ソナチネ）などのピアノ曲、動きのためのリズム曲、子どもの歌の弾き歌い、初見の弾き歌いなどである。

(5) ピアノ授業の課題曲

本学科では保育・教育を志す学生に必要なピアノ技術として、①ピアノ曲（ピアノ技術の向上と採用試験対策）、②リズム曲（幼児の遊びや動きのためのもの）、③弾き歌い曲（音楽を享受し、ともに歌い楽しむため

表3 ピアノ試験内容

年度生	教材	ピアノ曲	リズム曲	弾き歌い曲
2006 1年生	試験1	バイエル教則本 ブルグミュラー25番 ソナチネアルバム1		
	試験2			テキスト
	試験3			テキスト
	試験4	バイエル教則本 (未修了者)	テキスト 小品	
2007 1年生	クラス分け	バイエル教則本 60・93・96番		
	試験1	ブルグミュラー25番自選 ソナチネアルバム1自選		
	試験2		テキスト・ 簡易楽譜	
	試験3	バイエル教則本 ブルグミュラー25番 ソナチネアルバム1 ソナタアルバム1		
2007 2年生	試験4			テキスト・ 簡易楽譜

のもの)を3つの大きな柱として考えている。またその他、ひとつのメロディーを様々なリズムに変奏できる応用力や、アンサンブル力、就職試験で課されることが多い初見の力もつけさせたいと考えている。

ピアノ曲に関しては、採用試験課題の頻度を考慮に入れ、ピアノ演奏の入門書としてバイエルを用いて基礎的奏法を学ばせている。次に、ブルグミュラーへ進み表現力を養う。その後、ソナチネでしっかりとした構成の音楽を学ぶ。ピアノ曲の学習と並行し、弾き歌いとリズム曲を学ぶが、これについての詳細は後述する。

(6) チェックシートの配布

学習内容が多岐にわたり量も多いので、習熟度に合わせた達成曲数の成果を学生自ら確認できるように、2007年からチェックシートを配布した(資料2)。また月末をチェック日とし、学生が自主的に弾きためた曲を点検している。

(7) 試験と評価

2006年度生の試験(表3)は、1年生ではピアノ曲と弾き歌い曲を各1回、2年生では弾き歌い曲とリズム曲を各1回、計4回実施した。2007年度生の試験は、1年生ではクラス分けのための課題曲とリズム曲を各

1回、2年生ではピアノ曲と弾き歌い曲を各1回、計4回実施した。

評価は、2006年度生は課題曲の演奏、平常の授業態度と出席状況、実技テストの平均で行ない、2007年度生は、これに習熟度に合わせた達成度点を加えた。

3-2 学生の背景—入学時アンケートから

「器楽・声楽Ⅰ、Ⅱ」では習熟度別に授業を行っているが、同じグループでも学生の音楽的背景は多様で、授業内容を工夫していくためにはまずその実態調査が不可欠である。入学時に、「音楽学習経験に関するアンケート」と題する質問紙で、学生の情報を収集した。本節では、これを用いて2006年度生、2007年度生の背景および傾向を分析する。アンケート項目は、1. 学校での音楽経験について、2. 学校外での音楽経験について、3. 演奏できる楽器と持っている楽器、4. 出身高校の4項目である。本稿ではこのうち、1.と2.について以下にまとめる。アンケートは、資料1に示した。

3-2-1 学校での音楽経験について

(1) 高校での「音楽」の履修

高校での「音楽」の授業の履修者(図2)は、高校3年間での履修経験を総合した数値として、2006年度生が全履修者の66%、2007年度は58%という結果であった。各学年4割前後の学生は、中学校以来、学校で「音楽」の授業を経験していないことになる。

(2) 小学校・中学校・高校での音楽クラブ

小学校・中学校・高校での音楽クラブ経験(図3)は、2006年度が26%、2007年度が37%で、学生の3分の1前後が音楽クラブ経験者である。高校での音楽系所属クラブ(図4)では、吹奏楽部の所属者数が多く、音楽クラブ所属者中、2006年度は38%、2007年度は55%を占め、吹奏楽の人気の高さがうかがえる。その次が、音楽クラブ、合唱クラブと続く。

高校における「音楽」の履修者は2006年生より2007年生が減っている半面、音楽系クラブ経験者は増えており、その半分以上が吹奏楽クラブ所属であるのがこの2年間の特徴である。

3-2-2 学校外での音楽経験について

(1) 経験楽器の種類と学習経験年数

鍵盤楽器の学習経験については、ピアノ経験者が圧倒的に多く、その他吹奏楽で使用されるような楽器があったが、それらは極めて少なかった。ピアノ経験に

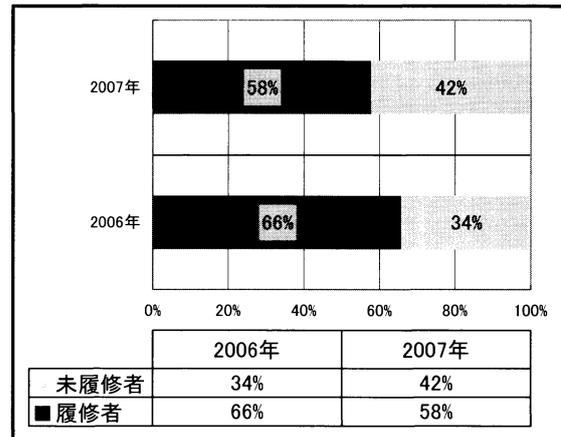


図2 高校での「音楽」の履修
(2006年度113名、2007年度129名)

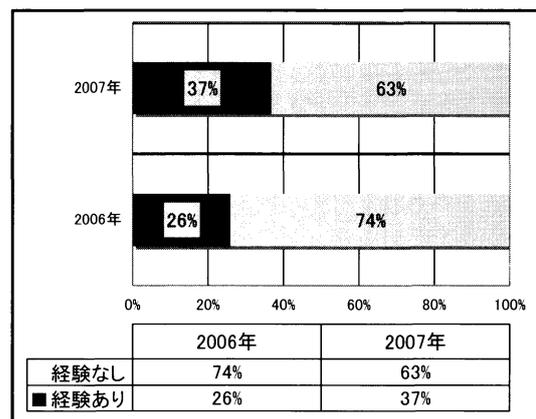


図3 小・中・高校での音楽クラブ経験の有無
(2006年度113名、2007年度129名)

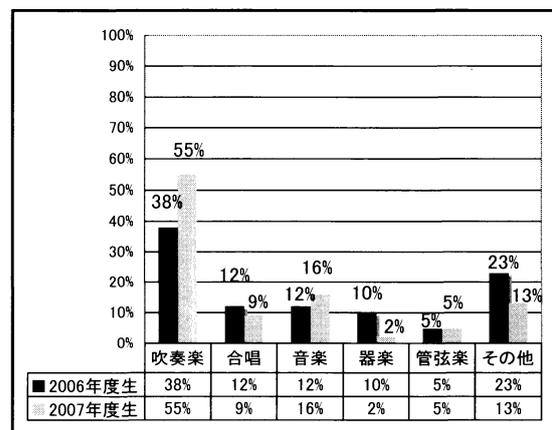


図4 音楽系所属クラブの種類(高校)
(高校での音楽系クラブ所属者2006年度29名、2007年度48名)

については、2006年度生が102名、2007年度生は96名であった。その他鍵盤楽器ではエレクトーンがあるが、エレクトーン経験は、2006年度生・2007年度生ともに8名であった。

鍵盤楽器の学習経験年数については（図5）、両年度とも4年～8年が最も多い。鍵盤楽器学習経験の全くない学生は、2006年度生が3名（2%）であるのに対し、2007年度生は25名（19%）と2007年度は初心者が多かった。

（2）使用した教則本

2006年度生の音楽経験教材としては、バイエル使用者が82名（以下はのべ人数）で、ブルグミュラー使用者が52名、ソナチネ使用者は36名、ソナタ（注4）に進んだ学生は13名でバイエル使用者の約6分の1の人数であった（図6）。2007年度生は、バイエル使用者が91名、ブルグミュラー使用者が40名、ソナチネ使用者は30名、ソナタへの継続者は8名でバイエル使用者の10分の1以下となっている（図6）。つまり、両年度生ともに比較的初級レベルの学習者が多く、前述した学習経験年数と照らし合わせると進度が順調に進んできたとは言えない。

2006年、2007年とも、80名前後（各年の77%と62%）

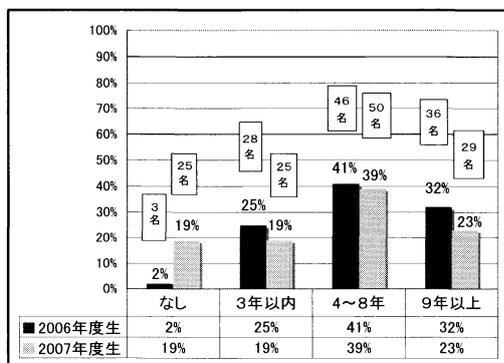


図5 鍵盤楽器学習経験年数
(2006年度113名, 2007年度129名)

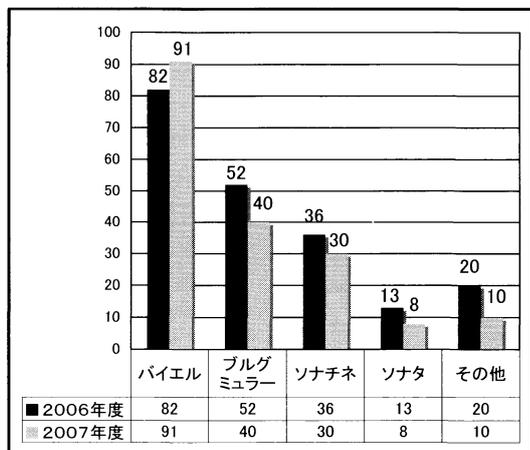


図6 使用教則本（数値は各教則本を使用した人数）
(複数回答有)
(2006年度113名, 2007年度129名)

の学生が4年以上の学習経験を持つにもかかわらずソナチネまでは到達できず、バイエルやブルグミュラーでピアノ学習を終えている（その他の教則本使用者の人数は少なく、高度な教材に進んだとは考えにくい）。

4. 「器楽・声楽Ⅰ, Ⅱ」における
ピアノ指導の経過

4-1 授業の実情

ここでは、2006年度と2007年度の授業の実際と問題点を述べる。

4-1-1 2006年度

2006年度は総合子ども学科の初年度にあたるため、学生の傾向や姿勢というものを、担当する指導者7名の勤務する国公立大学・私立大学・短期大学での経験から推測せざるを得なかった。そのため、ピアノ曲については、特に関西以西では就職試験課題曲として顕著である傾向から、バイエル、ブルグミュラー、ソナチネ、ソナタを設定した。また、一定以上のピアノ経験者のレベルにも配慮して、テキスト（坂井他2007）より、リズム曲については、走る・歩くなどの動きをイメージとして捉え、豊かな表現を習得出来るようなピアノソロ曲を採用し、弾き歌い曲は、作曲家オリジナル（注5）の3段譜（注6）の曲を、開講に合わせて準備した。

これらを教材として授業を進めた結果、以下の5つの問題や反省点が浮かび上がった。

①ピアノ授業の課題曲の扱い

ピアノ曲とリズム曲および弾き歌い曲を、学生の進度に合わせて適宜課題として提示した。しかし、課題曲の取り組み方の説明が不十分だったようで、学生はどのカテゴリーの曲をどれだけ取り組むべきかを十分理解していなかった。また、初見力やリズム変奏などの応用力を身につけさせるには、1年という期間は短すぎた。

②初心者への配慮

テキストのレベルが学生にとっては高過ぎたために、初心者が取り組める平易な曲が少なかった。テキストの弾き歌い曲は全て原曲の3段譜のため、ピアノ経験者でも歌いながら弾きこなすことは難しかった。従って、初心者や習熟度の低い学生を育てることが難しく、コード伴奏や簡易な伴奏による弾き歌いで試験を乗り切る結果となった。

③声量の問題

保育・教育現場では、教室の広さに対応できる十分な声量が必要である。しかし弾き歌いをする学生の歌声は小さい場合が多い。これは、グループレッスンがゆえに、「狭い部屋で他学生に歌声を聞かれるのが恥ずかしい」という心理も手伝っていたように思われる。

④リズム曲の選曲

前述のように、テキストのリズム曲は音楽的表現を求める選曲であったため、学生たちは曲を弾くことで精一杯になり、動きに合ったリズムとテンポでいきいきと弾くことができなかった。幼児が音楽を感じとって動けるような、シンプルかつ実用的な曲を課題とすべきであった。

⑤レベル別のクラス分け

3-1で述べた通り、指導上、また学生にとっても習得しやすいように、レベル別にクラス分けをして授業を進めた結果、ピアノ経験の豊富なグループは積極的に課題をこなし、グループレッスンの中でお互いのレッスンを「聴講する」という態度がみられ、相乗効果があった。しかし初心者やそれに近いピアノ経験の少ないグループでは、他学生と歩調を合わせたり、安心してマイペースになってしまったりする傾向があった。

以上を反省材料とし、2007年度への対策として、学生が各々の進捗をチェックし、目標意識を持って自主的に練習し、達成感を得られるよう、「チェックシート(資料2)」を作成した。また、初心者でも取り組みやすい2段譜の平易な弾き歌い曲を多数加えた。リズム曲についても同様に平易で実用的なものを加えた。これらについて次項で詳しく述べる。なお、発声やレベル別のクラス分け、リズム変奏や初見についての問題は、次年度の状況をうかがうことにした。

4-1-2 2007年度

2006年度で明らかになった5つの問題点の対策として、2007年度は課題曲のチェックシート(資料2)を配布してスタートした。これにより、学生が自分の学習状況を常時確認できるようになり、与えられた宿題をこなすというこれまでの受け身の立場から、宿題以外でも自ら選曲し、月1回のチェック日を目指して弾きためていくという積極的な姿勢が引き出された。2007年度の実情はチェックシートの項目順に述べる。

ピアノ曲の課題(表4)は、授業回数を考慮して、バイエルは45~104番までの抜粋30曲、ブルグミュラーは抜粋9曲、ソナチネは抜粋11曲とした。目標習得曲

数(表5)を設定し、1年生(後期)では、バイエルは6曲、ブルグミュラー・ソナチネは3曲以上を弾くこと、2年生(前期)では、バイエルを終了しブルグミュラーを1曲以上仕上げる、ブルグミュラー学習者はソナチネ1曲以上仕上げることとした。バイエルを終了後は少しでも早くブルグミュラーへ、ブルグミュラー終了後は少しでも早くソナチネへ進むよう奨励し、バイエルから始めても何とかソナチネ1曲を弾けるようになることを理想とした。採用試験の課題がバイエル、ブルグミュラー、ソナチネの3種のピアノ曲のどれでもよければ問題はないが、指定される場合が多く、ソナチネに到達することは不可欠である。

初回のクラス分けの授業(表3クラス分け試験1)では、自習課題として提示したバイエル60・93・96番、ブルグミュラーとソナチネから自選の1曲を演奏させた。各曲を演奏した人数はバイエル60番が70名(3名は右片手弾き)、93・96番が19名、ブルグミュラーが26名、ソナチネが13名であった。全体に失敗を恐れ弾きやすい曲を選曲した傾向があり、学生の約70%がバイエルを弾いた。前述したように、ピアノの経験年数が比較的長いにもかかわらず習熟進度が遅いという結果とあわせて考えると、演奏力への自信のなさがうかがえる。

初心者には授業開始前の1年生前期の間にバイエル60番までを自習しておくことを課しており、初回の授業は45番から始めることになっている。しかし実際には45番から始めるのは無理で、バイエルの最初から手ほどきをしないとスタートラインに立てない学生が10名以上いた。音楽の知識があまりない状態で自学自習する難しさがうかがえる。また、音楽系クラブ経験(図5)で得ているはずの音楽的知識や経験が生かされていないのが残念である。バイエル終了の目標を達成できなかった学生は58名おり、前年度の2倍強、ブルグミュラーで終わった学生は40名でやはり2倍強であった。この学生達は、授業終了後に自力でソナチネ1曲を弾けるまでの力をつけなければならない。希望すれば3年生の前期に「器楽・声楽Ⅲ」を選択することができるが、48名の定員があり、採用試験までの間にどのように演奏力を維持し高めていくことができるのか憂慮される。

リズム曲については、テキストの32曲中初心者向けの曲が比較的少なかったため、「歩く」「走る」「とぶ」「ゆれる」の4つに弾きやすい簡易楽譜を10曲追加した(表4)。しかし、バイエルで奏法を学びながら同時進行でリズム曲のレパートリーを増やすことは、技

表4 チェックシートの曲種と曲数

バイエル抜粋	30	リズム曲	32	弾き歌い曲	25
ブルグミュラー25番抜粋	9	簡易楽譜	10	簡易楽譜	17
ソナチネアルバム1抜粋	11				
計	50曲	計	42曲	計	42曲

表5 2007年度生 ピアノ曲・リズム曲・弾き歌い曲の目標習得数

	ピアノ曲		リズム曲		弾き歌い曲		
1年生	バイエル教則本 ブルグミュラー25番 ソナチネアルバム1	6曲以上 3曲以上 3曲以上	歩く・走る・とぶ・ ゆれるから各2曲以上	8曲以上	あいさつ 季節 その他	2曲以上 各1曲以上 2曲以上	8曲以上
2年生	バイエル教則本 ブルグミュラー25番 ソナチネアルバム1	終了 終了 1曲以上	歩く・走る・とぶ・ ゆれるから各2曲以上	8曲以上	すみれ	あいさつ 全曲 季節 各1曲以上 その他 2曲以上	8曲以上
					つばめ	全曲	

術的にも時間的にも非常に無理がある。バイエルやブルグミュラーが未終了の段階では、簡易楽譜でさえ弾きこなすのは難しい。最低達成曲数(表5)16曲に対し、現実の学習曲数は2~9曲であった。

弾き歌い曲(表4)は、リズム曲同様、テキスト掲載の25曲には初心者が弾ける曲が少なかったため、「あいさつと生活の歌」を新たに設け、「季節と行事(春・夏・秋・冬)」「その他」の6つのジャンルに、弾きやすい2段階の簡易楽譜を17曲追加した。バイエルをやっと弾けるような技量で、「歌いながら弾く」という同時動作はやはり難しい。十分弾けるようになって初めて声を合わせることができるので、弾き歌い曲を仕上げるにはかなり時間がかかる。16曲の最低達成曲数に対し、現実の学習曲数は1~9曲で、リズム曲よりも達成率がやや低かった。

ピアノ曲は基本的な演奏技術を高めていくための教材として設定しており、リズム曲や弾き歌い曲は子どもたちを音楽的に援助するための教材である。保育者に必要なテンポ感、リズム感、表現力、アンサンブル力など、多面的な音楽的能力を磨くには、まず音楽的な質と同時に弾きやすさを兼ね備えた、保育・教育現場で活用しやすい教材を採用することが第一の課題である。チェックシートの試行で浮上した第二の問題は、弾きやすい教材から弾き進めていくために、習熟度が高いほど学習達成曲数が多くなり、評価が高くなることである。この2つの問題点を受け、次年度のために、習熟度別のチェックシートの検討と教材の再考を行うこととした。

4-2 授業終了時の意識調査

学生が授業に何を求め、今後の音楽学習にどのような不安や不明点を持っているかを探っていくことは、今後の授業改善のためにも重視すべきことである。そこで、2007年度「器楽・声楽Ⅱ」終了時に授業の感想を記述させた(表6)。

表6 2007年度生の授業終了時の感想(複数記述有)

現場で役立つことを学べた	34名
ピアノや弾き歌いの自信がついた	25名
授業が楽しかった	20名
弾き歌いをもっと勉強したかった	20名
子どもと一緒にちゃんと歌えるか不安	18名
コードの勉強ができた	12名
発声法を学びたかった	10名
ピアノや弾き歌いがうまくなりたい	9名
ピアノが好きになった	8名
歌をたくさん知りたかった	8名
自分なりに頑張った	7名
弾き歌いが楽しかった	6名
ピアノの授業を増やしてほしい	4名
ピアノ曲をもっと弾きたかった	3名
採用試験のことを知りたい	3名

感想の記述を整理すると、「現場に役立つことを学べた」が34名と多く、「ピアノや弾き歌いの自信がついた」が25名と全体の約5分の1を占めている。また、「授業が楽しかった」が20名、「弾き歌いをもっと弾きたかった」が20名、「コードの勉強ができた」が12名という感想が多かった。また、8名が「ピアノが好きになった」と記述している。このように前向きな回答が多かったことは、我々指導者にとって大きな喜びであった。実際にピアノ曲の進捗等が予定外に進まなかったことは反省点であるが、学生は楽しみながら学習し、

自信がついたと感想をあげていることは、我々の思いを伝えられたと言ってよいのではないか。指導の目的である「音楽を楽しむ」ことができる学生にたった1年間で育てることができたということは重要なことであつたと考える。

しかし前向きな回答が多かった反面、「子どもと一緒にちゃんと歌えるか不安」が18名と全体の約7分の1を占めており、我々指導者は、学生の不安をしっかりと受け止めて指導して行かなければならない。他に、「頑張ってピアノや弾き歌いがうまくなりたい」が9名、「ピアノの授業を増やしてほしい」が4名、「採用試験のことを知りたい」が3名おり、継続して勉強したいという意欲的な学生がいることがわかつた。

5. 考察とまとめ

本学科立ち上げの1年間は学生の実態がつかめず、初心者や習熟度の不十分な学生を一から手ほどきし目標のレベルまで導くことは、指導者にとって大変苦勞をとまなうものであつた。本学科におけるピアノの授業は、基本的に「音楽の楽しさを伝えられる学生」の育成を大前提としているが、同時に全ての学生をわずか1年の授業で実習や就職で要求される水準にまで育てなければならないという厳しい課題を抱えている。

今回の調査の結果、2006年度と2007年度の学生の実態が明らかになつた。ピアノの経験者は、両年度とも100名前後おり、学生総数の多くを占めていた。しかし、習熟度や音楽の基礎知識と音楽への意識については、全体に高くはないことを認めざるを得ない。幼児期の習い事としてのピアノの一般化や、学ぶ姿勢の安易さが、現在の学生の状況を生み出していると考えられる。家庭教育や学校教育を取り巻く社会状況の変化や風潮が大きく作用していると言えるのではないだろうか。このような時代の学生にとって、毎日の地味な積み重ねを必要とするピアノ技術の習得は、不得手である。また就職に対する機運が高まっていないことは進路に関するアンケート(図1)からもおよそ推測できる。1年間の授業は30回であるが、1人当たり約10分のレッスン時間を合計すると、わずか5時間である。例えば、市井のピアノ教室における週1回30分の一般的な個人レッスンに換算すると、2ヶ月半にしかならない。この現況の下、指導者は、授業の中でできる指導の工夫と調整を可能な限り行ってきた。しかし、2007年度は、バイエルの未終了者が58名と、前年度より倍以上に増え、ブルグミュラー未終了者40名を含め

ると98名、72%の学生が就職試験水準に達することができなかった。また実習前に、習熟度の高い学生(ソナチネ以上に達した38名)であっても、弾き歌い曲やリズム曲などを必要水準で弾きこなすような応用力が身につかなかつた。学生自身、努力しても本学科のペースにはついていけずに苦戦しており、授業終了時の意識調査(表6)では、自らの力不足を自覚し、実習や就職に不安を抱き、継続して勉強したい気持ちを訴える学生が多いことがわかつた。

ピアノの授業は、学生が予習していなければ成り立たない特殊なものであり、特に時間に制約のある本学科では、学生の自習力をいかに付けるかが一番のポイントであると考えられる。普段の授業で自習力をつけるために、楽譜の知識・読譜法・練習法・演奏法などを含めて指導しなければならないが、5時間という授業の中でこなすことは不可能である。この問題を解決すべく可能性を探った結果、学生達の自習の手助けとなるような方法を見出した。それは、バイエルの自習書である。授業が始まるまでの半年の間に、自力で練習できるよう援助するため、59番までの厳選した16曲についてどこから始めてもわかりやすいように解説したテキストを作成し、1年生の初心者および希望者に配布した。これにより2008年度は、ある程度の基礎知識と読譜力をつけて授業に臨んでくれることを期待するものである。さらにもう一点、コード伴奏と簡易伴奏による曲集を新たに制作した(坂井他2008)。2006年度は作曲家のオリジナル楽譜にこだわったため使用テキストが本学科の学生にとって難しかったことから、2007年度では容易に弾くことができる曲を追加した経緯がある。新しい曲集は、2007年度の追加曲を土台として作成しており、運指が容易であることに加え、単に弾きやすいだけでなく音楽的で楽しめるよう選曲し、アレンジを工夫した。これにより2008年度以降は、音楽を楽しみながら練習ができる要素が増えることと考えている。

このほかに「2. カリキュラム」で述べた、ピアノ授業以外の音楽関係の授業との連携も今後の課題である。1年時選択科目の「音楽の基礎」を初心者にはできる限り履修させることや、「器楽・声楽Ⅰ、Ⅱ」と「器楽・声楽Ⅲ」の間に位置する「保育内容の研究(音楽表現)」を「器楽・声楽Ⅰ、Ⅱ」の授業と関連付けることなどによって、「器楽・声楽」の時間的な短さを補い、学習意欲を持続させる可能性があり、現在これを試みている。

残る問題として、近年、保育・教育現場や採用試験

で要求されるようになってきたリズム変奏および初見の弾き歌い、それに加えて歌唱力の養成がある。1年という短い期間の問題や学生の実情なども合わせると、これらの応用的な内容を授業に含めていくことには困難が予想される。しかし、本研究で明らかになった「楽しく学習することによって生まれる積極性」を重視し、授業外の時間に取り組む課題を整理するなど、授業改善を考えていきたい。

今後も保育所や幼稚園での音楽の傾向や、実習において音楽面でどの程度の対応ができたのかを調査し、次年度以降の指導に役立てることが急がれる。採用試験では音楽のウェイトが大きいことが懸念され、ピアノの実技が合格のネックになる情報もある中、われわれ指導者も危機感を持って対処していかなければならない。

「器楽・声楽Ⅰ、Ⅱ」のうち、ピアノの授業は、大西ゆみ、衣川久美子、古庵晶子、幸野紀子、篠原真紀子、山崎和子の6名が担当している。今回は、主として初心者も多く担当した衣川、古庵、篠原、山崎で研究を行った。大西、幸野両氏は、情報やデータを提供した。

本研究は坂井以下5人の共同研究であるが、執筆は分担で行った。各項の文責は、1・3-1・3-2-1・4-1-2は山崎、2は坂井、3-2-2(1)は篠原、3-2-2(2)・4-2は衣川、1・4-1-1は古庵である。5は共同で執筆した。図1・6、表6は衣川、表1～5・図2～4・資料1・2は山崎、図5は篠原が担当した。

注

- 1) 弾き歌いは、ピアノ伴奏を弾きながら、歌うことである。保育・教育現場で、模範演奏や歌唱指導に用いる。
- 2) リズム曲は、指導に必要なマーチ・スキップ等のリズムを用いた曲である。
- 3) コード奏は、1段譜の歌のメロディーに付けられたC・F・Gなどのコードネームを読み取りながらコード(和音)を基にした伴奏を自由につけて弾く方法である。なお、コード奏に関しては、本研究では取り上げない。
- 4) 一般的には、ソナタまで達すると好きな曲を楽しむことができるレベルである。4～5歳前後から10代後半まで習い続けていけば、順調な場合、ソナタまで進むことができるが、さまざまな理由で中断し、進捗が遅くなることが多い。
- 5) ここで言うオリジナルとは、原曲を指す。
- 6) ここで言う3段譜とは、上から順に1段目が歌唱パート

で、2、3段目は両手による伴奏から成る楽譜である。これに対して2段譜は、1段目が右手で歌唱パートを弾き、2段目が左手で伴奏を弾く楽譜である。従って2段譜の方が平易である。

引用文献

- 上谷裕子・津山美紀2007「保育者養成課程における初心者の器楽基礎について」全国大学音楽教育学会研究紀要、第18号、pp.92-102
- 小倉隆一郎2007「Music Laboratoryを用いた初心者へのピアノ指導：読譜力の向上に着目して」文教大学教育学部紀要 41、pp.73-81
- 小西由利子・清葉子2007「教育実習を通しての学生の学び・育ち—音楽表現に関する視点から—」全国大学音楽教育学会研究紀要、第18号、pp.52-60
- 坂井康子・岡林典子・南夏世・山崎和子2006『幼稚園教諭、保育士、小学校教員をめざす人のためのピアノテキスト—歌おう弾こうこどもとともに』ヤマハミュージックメディア
- 坂井康子・岡林典子・南夏世・佐野仁美2008『コードでかんたん！こどものうたマイレパートリー』ヤマハミュージックメディア
- 星野英五2007「学生の音楽意識調査に基づく授業展開報告Ⅱ」全国大学音楽教育学会研究紀要 第18号、pp.71-81
- 梁島章子・山崎和子・鹿谷奈智子・坂井康子1989「初等教員養成のピアノ指導についての研究」京都教育大学紀要、人文科学・社会科学第75号A、pp.59-84
- 梁島章子・山崎和子・鹿谷奈智子・坂井康子1993「初等教員養成のピアノ指導についての研究(2)—基礎と応用—」京都教育大学紀要、人文科学・社会科学第83号A、pp.31-52
- 梁島章子・山崎和子・坂井康子・松井明恵1996「初等教員養成のピアノ指導についての研究—アンサンブル力を育てる指導—」京都教育大学紀要、人文科学・社会科学第88号A、23-49
- 梁島章子・山崎和子・坂井康子・松井明恵 2001「音楽理論の理解と鍵盤楽器演奏の融合的な指導—初等教員養成での試み—」京都教育大学紀要、人文科学・社会科学第98号A、pp.11-32
- 若菜直美・高橋由希季子・西村範子・磯田由紀子・酒井由美子2006「短期大学保育科における初学者・初心者のためのピアノ指導法の改善：専任講師・非常勤講師の協同・協奏の試み」文化女子大学室蘭短期大学研究紀要 29、pp.5-22

資料 1 音楽学習経験等に関するアンケート

1. 学校での音楽経験について

(1) 高校での音楽の授業
 ・ 選択した はい いいえ
 ・ 選択したのは何年の時ですか? 1年 2年 3年

(2) 小学校・中学校・高校での音楽クラブ
 ・ 入っていた はい いいえ
 ・ 入っていたのはどんなクラブでしたか?
 小学校 () 中学校 () 高校 ()

2. 学校外での音楽経験について

(1) 経験した人はその種類と学習期間は?
 ・ 種類 期間
 ・ 種類 期間
 ・ 種類 期間

(2) 使用した練習曲あるいは学習曲
 () バイエル () その他 _____
 () ブルグミュラー 25 番 _____
 () ソナチネアルバム _____
 () ソナタアルバム _____

3. 演奏できる楽器と持っている楽器は?
 (1) 持っている楽器: 自宅に _____
 寮・下宿に _____
 (2) 演奏できる楽器 _____

4. 出身高校
 _____ 県 _____ 市 _____ 高校

資料 2 器楽・声楽チェックシート

バイエル教則本															
45	49	48	52	55	59	60	62	65	84	72	67	78	80	81	
83	86	88	89	90	91	93	97	98	94	98	99	100	102	104	
ブルグミュラー 25 番								ソナチネ 1 【2, 3, 5, 7, 13, 16 以外の 1・田楽調】							
2	3	9	10	15	20	21	25	曲番	曲番	曲番	曲番				
動きのためのリズム曲・その他 P はプリント、それ以外はテキスト															
歩く				走る				とぶ				ゆれる			
P Bce マーチ	P 草鞋馬				P オクラホマミキサー				P かわいいオーガスチン						
P コーヒーカップ	P のどかな春				P キリンの親子				P 気のないアセル						
P 静かな湖畔	P 機嫌				P ドラえもんうた				P メヌエット長調						
マーチ	楽しい夏休み				芝生の上で				こどものワルツ						
小人の行進	学校のかえり				キルカ				落ち葉のささやき						
ハイ・ホー	ジェットコースター				ちょうちん追い				おどりのおけいこ						
ラッパのセレナーデ	スピード自動車				ギョロップ				手回しオルガン						
兵隊の行進 (連弾)	チップスウィークス (連弾)				ドリブル				スケルツォ (連弾)						
ライオンの行進 (連弾)					口笛をふきながら										
例き歌い曲 (P はプリント、それ以外はテキスト)															
あいさつと生活				季節と行事/秋				その他							
P あくしゅでこんにちは				P まつぼっくり				P アイアイ							
P さよなら				P そらでえんそくしてみたい				P いぬのおまわりさん							
P おはよう				P 山のワルツ				P おつかいありさん							
P おかたづけ				P 夕焼け小焼け				P お化けなんてないさ							
P おべんとう				P 季節と行事/冬				P おもちゃのチャチャチャ							
P 季節と行事/春				P あわてんぼうのサンタクロース				P かわいいかくれんぼ							
P お馬				P ジンメル				P サッちゃん							
P こどりのうた				P お正月				P きんぼ							
春の小川				P コンクンシャンのうた				P そうさん							
こいのぼり				P まめまき				P そうだつたらいいのにな							
とけいのうた				P うれしいひなまつり				P どうぶつえんへいこう							
めだかの学校				P うれしいひな祭り				P バスこっこ							
P 季節と行事/夏				P 思い出のアルバム				P ふしぎなポケット							
P アイスクリムのうた				P ねんせいにいになったら				P ミッキー・マウス・マーチ							
P あめふりくまのこ															
P うみ															
P たなばたさま															